太陽放射エネルギー観測の現状と課題

早坂忠裕

(東北大学・大学院理学研究科)

謝辞:下記の方々の図をお借りしました。

高村民雄(千葉大学)

内山明博(気象研究所)

三枝信子(国立環境研究所)

内容

- 太陽放射エネルギー観測の歴史
 - 19世紀以前から20世紀初めまで
 - 空洞黒体絶対放射計
 - サーモパイル型日射計
 - 世界放射基準(WRR)と世界放射センター(WRC)
 - 国際地球観測年による世界展開
 - Baseline Surface Radiation Network (BSRN)
- 現在の気候変動研究における日射量の観測
 - 日射量の全球マップ図
 - Global Dimming and Brightening
 - 日照時間や雲量を用いた日射量の推定
- 分光放射計による太陽放射観測の現状
 - 検定の重要性
 - 多様な使われ方
- まとめ
 - 観測機器固有の課題
 - 観測目的に応じた測器、検定、オペレーション

太陽放射エネルギー観測の歴史

19世紀以前から20世紀初めまで

Pouilletの直達日射計

- イギリスの天文学者 J. F. W. Herschellによる無気黒色温度 計を応用-太陽放射の吸収熱 を温度変化に代えて計測。
- 1837年、フランス人Pouilletによる太陽定数の推定。
- 現在の太陽定数よりも13%小 さい値を得た。
- その後の流水式日射計や銀 盤日射計の原型となった。



Figure 1. Pouillet's pyrheliometer. A : blackened receiver (metallic container filled with water); T : bulb of thermometer; D, C : alignment check.

(Fröhlich, 1991)

銀盤日射計

- 1908年にスミソニアン天体物 理研究所で開発
- 日本では1932年に中央気象 台で開発、その後1981年ま で使用
- 黒色塗装された銀盤の温度変 化を水銀温度計を用いて測定



図 7.7 銀盤日射計の構造
a:銀盤 b:水銀温度計 c:銅の円筒容器
d:木製容器 e:筒 f:隔壁 h:シャッター
i:太陽直射光 k:温度計支持板

(気象研究ノート185号、1996より)

オングストロームの電気補償式直達日射計

- 1893年、K. Ångströmにより開発された。
- 薄い黒色マンガニン板2枚の1枚に受光、もう1枚に電流を流してジュール熱を発生させる。同じ温度になるように調整して受光した太陽放射エネルギーを推定する。
- 現在の絶対放射計に繋がった。



Figure 2. Ångström compensation pyrheliometer. Left, general view; right, detector. $S_{1,2}$ adjustment for alignment on the sun; W: shutter for shading left- or right-hand strip; R: detector tube; T: thermometer; K_1 : current connection; K_2 : thermoelement connection; C: current switch for selecting left- or right-hand strip heating. (Erablich, 1001)

(Fröhlich, 1991)



図 7.6 オングストローム補償日射計の構造
 A:開口 B:バッテリー C:受光板 D:金属筒
 P:切替スイッチ R:可変抵抗 S:シャッター
 T:熱電対 G:検流計 mA:電流計

(気象研究ノート185号、1996より)

空洞黒体絶対放射計

- 1960年代にアメリカ・ジェット推進研究所 (JPL)等が開発。
- 受光部と補償空洞にヒーターを巻き、電気的に加熱して受光時と遮蔽時の両者の温度差を電気的に補償して測る(能動型)。
 または、遮蔽時に受光部が受光時と同じ温度になるように加熱して電気的に熱量を測る(受動型)。





(Kendall and Berdahl, 1970)

サーモパイル型全天日射計

- 熱電堆(thermopile)を用いて
 受光部とヒートシンクの温度差
 から生じる起電力により測定。
- または、大きさや色(白・黒)を 代えて2種類の熱電堆受光部 を用い、その温度差から日射 量を測定。
- 熱電堆には一般に銅・コンスタンが用いられる。





図 7.13 2 枚の受光板を持つ全天日射計受光部の 単純化された構造

$$\theta_{P2} - \theta_{P1} = S \cdot \left\{ \frac{\alpha_2 \cdot A_2}{K_{B2} + K_{S2}} - \frac{\alpha_1 \cdot A_1}{K_{B1} + K_{S1}} \right\}$$
(7.31)

$$\theta_{P2} - \theta_{P1} = \frac{S \cdot A}{K_B + K_S} \cdot \{\alpha_2 - \alpha_1\}$$
(7.32)

(気象研究ノート185号、1996より)

世界放射基準(WRR)と世界放射センター(WRC)

- WRRは1977年に5台の空洞黒体絶対放射計の平均値として定義。
- スイス・ダヴォスの世界放射センター(WRC)で維持。精度は±0.3%以下。
- かつてのÅngström Scale 1905(主にヨーロッパで使用)とSmithsonian Scale 1913(主にアメリカで使用)の差は5.0%であったことが判明。
- その結果、
 - WRR/Ångström Scale 1905=1.026
 - WRR/Smithsonian Scale 1913=0.977
 - WRR/IPS-1956=1.022
- 我が国では1956年までSmithsonian Scale 1913、その後1980年まではIPS-1956、その後はWRR。

Physikalisch-Meteorologisches Observatorium Davos (PMOD) / World Radiation Center (WRC)

- ・もともとは結核の療養所として1907年に設立。
- ・1909年から太陽直達光の観測を開始。
- 1926年にSFI(Schweizerisches Forschungsinstitut für Hochgebirgsklima und Medizin:高山気候と医療 に関するスイス研究所)の一部となった。
- ・1971年に世界気象機関(WMO)がWRCに指定。



国際地球観測年(International Geopysical Year, IGY1957-1958)

"One of the principal aims of the IGY was to learn more about the relations of our planet to the sun. The meteorological programs in all parts of the world were reinforced with solar radiation measurements." (Landsberg, 1961)



Fig. 1. Terrestrial effects of solar flares (reproduced by courtesy of Dr. M. A. Ellison)

(Martin, 1958)

Baseline Surface Radiation Network (BSRN)

- WCRP/GEWEX の一環として1992年にスタート。2007年まではスイス連邦工科大学(PI=大村纂)で維持。その後はドイツのAlfred Wegener Institute for Polar and Marine Research (AWI)が維持。
- 精密な放射測定システムを備え、気象データ等も近くで観測されていることなど、厳しい条件を満たした観測ステーションのネットワーク。現在59箇所。



現在の気候変動研究における日射量の観測





図18 6月の月間全天日射量(kcal/cm²month)の地理的分布

 $(1 \text{ kcal/cm}^2/\text{month} = 16.15 \text{ W/m}^2)$

夏の日平均日射量(地表における下向き短波放射量)



(Raschke, 2004)

冬の日平均日射量(地表における下向き短波放射量)



(Raschke, 2004)



FIG. 1. The global annual mean Earth's energy budget for the Mar 2000 to May 2004 period (W m⁻²). The broad arrows indicate the schematic flow of energy in proportion to their importance. (Trenberth et al., 2009)

DIMMING

BRIGHTENING



Observed tendencies in surface solar radiation (W/m²/decade)

	1950s-1980s		1980s-2000		after 2000	
USA	-6	1	5	-	8	1
Europe	-3	-	2		3	-
China/Mongolia	-7	1	3	-	-4	-
Japan	-5	-	8	1	0	
India	-3	1	-8	1	-10	1

(Wild, 2012)



FIG. 5. Distribution of long-term [% $(10 \text{ yr})^{-1}$] variations in annual mean global solar radiation in China. Station trend indicators with circles around them are significant at the 95% confidence level.





Aerosol Optical Thickness in China

From Qiu et al. (2000), Luo et al. (2001), Chu et al. (2003)



From Qiu et al. (2000), Luo et al. (2001), Chu et al. (2003)

Total cloud amount trend for 1951 - 1994

3600

KAISER: ANALYSIS OF TOTAL CLOUD AMOUNT OVER CHINA



Figure 1. Trends in annual mean midday cloud amount for 1951-1994 (percent sky cover per decade). Station trend indicators with circles around them are significant at the 95% confidence level, as are regional trend values in red.

Kaiser (1998, GRL)



Parameterizations for SW radiation (1)

For clear sky condition, downward SW flux is estimated by using basic meteorological data,

$$\frac{S_{df}}{S_{0d}} = (C_1 + 0.7 \times 10^{-m_d F_1})(1 - i_3)(1 + j_1)$$

$$C_1 = 0.21 - 0.2\beta_{DUST}, \qquad \beta_{DUST} < 0.3$$

$$= 0.15, \qquad \beta_{DUST} \ge 0.3$$

$$F_1 = 0.056 + 0.16(\beta_{DUST})^{0.5}$$

$$i_3 = 0.014(m_d + 7 + 2\log_{10} w)\log_{10} w$$

$$j_1 = \left[0.066 + 0.34(\beta_{DUST})^{0.5}\right](ref - 0.15)$$

 S_{df} : average downward SW flux on the Earth's surface, S_{0d} : SW flux at the top of atmosphere, β_{DUST} : turbidity factor, m_d : daily mean optical airmass, *w*: precipitable water, *ref*: surface albedo

Parameterizations for SW radiation (2)

For cloudy sky condition, downward SW flux is estimated from sunshine duration,



 S_d : average downward SW flux on the Earth's surface, S_{0d} : SW flux at the top of atmosphere, N: sunshine duration, N_0 : maximum sunshine duration, $a, b, c, \Delta N$: parameters depending on the instrument type



Monthly Average SW Flux, Shanghai



Monthly Average SW Flux, Shanghai

分光放射計による太陽放射観測の現状

太陽直達光の分光観測によるエアロゾル光学的厚さの推定

(2012.10.08 仙台)





- ■標高:3400m(下層雲の上)
- 大気が安定(亜熱帯高気圧帯)
- ・他の観測データが利用できる(水蒸気量、オゾン量、 エアロゾル散乱・吸収係数、CCN個数、ライダー、ゾンデ)

Langley plot の例(2007/11/16, POM-02) (気象研・内山による)



2007年11月16日のデータをLangleyプロットした。 データが、直線に乗っている(一部ずれているデータは、 センサー出力の線形性テストを行った時間帯のデータ)。 マウナ・ロア観測所では、この例のように非常に良いデータが 取れる。

Cosine characteristics of MS-700 sensor and correction factor only for direct radiance (千葉大・高村による)





(国立環境研究所・三枝による)



観測手法の標準化は分野毎のネットワークで各々必要

(国立環境研究所・三枝による)



まとめ

- ・ 観測機器固有の課題
 - 全天日射計・直達日射計の原理、検定方法はほぼ確立。
 - 干渉フィルターによる分光放射計の安定性は近年改善された。
 - 回折格子による分光放射計は比較的安定している。
 - 分光日射計(紫外線計、光量子センサー等を含む)においては、入射角特性(COS特性) 及び受光センサー感度の波長依存性で改良が必要。
- 観測目的に応じた測器、検定、オペレーション
 - 現在の気候変動研究における日射量の観測
 - 長期間のデータが必要、精度は現状(~5W/m²)で可。
 - 全自動化は難しい。日射計のガラスドームのクリーニング等が必要。
 - 日照時間等を用いた日射量の推定も有用。
 - 全球を高時空間分解能でカバーするには衛星データの利用が不可欠。
 - 分光放射計による太陽放射観測
 - 各種波長別(分光)放射計の検定方法の確立が必要。
 - 研究分野、目的によって必要な時空間分解能や測定精度が異なるので、それに合わせた観測 方法を選択することが重要。



関連研究者における情報の共有と協力により、放射観測を 活用することが重要